埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

ヨーゼフ・シュトラウスの〈ロメオとジュリエット〉：グノーのオペラに基づくポプリ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Romeo and Juliet, potpourri, Strauss, Gounod, Expo in Paris 作成者: 若宮, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/272

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ヨーゼフ・シュトラウスの〈ロメオとジュリエット〉
― グノーのオペラに基づくポプリ ―

“Romeo and Juliet” by Josef Strauss
A Potpourri based on Gounod’s Opera

若　宮　由　美
WAKAMIYA, Yumi

The Austrian National Library possesses a piano score of potpourri based on Ch. Gounod’s opera *“Romeo and Juliet”* that was arranged by Josef Strauss. The socre was published as No.107 of the series named *‘Anthologie Musicale’* by the publisher Spina. The background of this potpourri is not known. The French Opera *“Romeo and Juliet”* by Gounod was premiered in Paris on April 27, 1867 during the Expo in Paris, and was performed in German in Vienna on February 5, 1868. The author found the advertisement of the Strauss’s Concert in Volksgarten dated July 24, 1867 in which the “Großes Potpourri aus der Oper *Romeo und Julie*” by Josef Strauss was announced as a new work. It became clear that this potpourri was actually performed by the Strauss Orchestra.

1　序：研究の動機

2014年３月、筆者はオーストリア国立図書館でヨーゼフ･シュトラウスJosef Strauss（1827-70）によるポプリ２曲を発見した。アーベルト Johann Joseph Abert（1832-1915）の独語オペラ《アストルガ Astorga》[1)]、ならびにグノーCarles Gounod（1818-93）の仏語オペラ《ロメオとジュリエット Roméo et Juliette》[2)]に基づくポプリである。ともにウィーンの出版社C.A.シュピーナ Spina社が出版した、*‘Anthologie Musicale (Musikalische Blumenlese). Fantasies en Forme de Potpourris sur les Motifs les plus favoris d’Opéras’*（以下、『ポプリ選集』と表記）と題するシリーズに含まれていた。

ところで、「ポプリ」とは何であろうか。19世紀には、オペラを原曲とするポプリがしばしば作られた。ドイツ語の音楽事典*MGG*によれば、オペラのポプリは「Fantasie, Mélange, Divertissment, Bouquet, Medley等の名称でも出版された。音楽的な構成はいずれも同じである。つまり、［オペラの中の］最も重要かつ効果的なメロディーだけを使って、原曲であるオペラの劇構成上の配置を考慮せずにつなぎあわせた曲であり、新しく作曲した移行部を含むことがある」（BALLSTAEDT 1997: 1760）。そして、「20世紀の大衆音楽では

キーワード：ロメオとジュリエット、ポプリ、シュトラウス、グノー、パリ万博
Key words　：Romeo and Juliet, potpourri, Strauss, Gounod, Expo in Paris

メドレーと記されるもの」（BALLSTAEDT 1997: 1761）と定義されている。

話をヨーゼフ・シュトラウスに戻そう。彼の作品については、現在までにいくつかの作品目録が刊行されている。それらの作品目録に、上記のポプリが記載されているかを調べた。(1) ヴァインマンによる作品目録（WEINMANN 1967）：「ポプリ」という曲種の楽曲がひとつも含まれない。(2) シェーンヘルによる作品目録（SCHÖNHERR 1982）：この目録にも「ポプリ」は１曲も含まれない。(3) ケンプによる作品目録（KEMP 2001）：「作品番号なしに出版された曲」として２曲、「消失作品」として７曲が記載されているが、研究対象の２曲を含まない[3)]。(4) マイラーによる作品目録（MAILER 2002）：「未出版の作品」として５曲のポプリを含むが、対象２曲は含まない[4)]。(5) リンハルトによる作品目録（LINHARDT 2006）：「作品番号のない現存作品」として２曲、「消失作品」として８曲が記載されているが、対象２曲を含まない[5)]。いずれの作品目録にも、シュピーナ社刊のポプリ２曲は記載されていないことが判明した。すなわち、ヨーゼフ・シュトラウスの作品としていまだに認知されていない作品だということである。

ヨーゼフ・シュトラウスは42年の生涯で500曲以上の編曲を手がけたと言われている。しかし、シュトラウス楽団を解散した弟エドゥアルト Eduard Strauss（1836-1916）が、1907年10月に楽団所有の楽譜のすべてを焼却したため、シュトラウス家ならびにシュトラウス楽団の活動を、楽譜の面から検証することはきわめて難しい状況にある[6)]。シュトラウス家の３兄弟が自作として出版した作品だけが世に残り、一次資料の欠落のせいで、楽団が演奏した他の作曲家の作品や編曲は充分に把握できないからである。

本研究では、このうちの〈ロメオとジュリエット〉に対象を絞り、いままでに明らかにされていない、同ポプリ誕生の背景について考察していく。楽譜に記載された題名は、*“Potpourri über Motive der Oper: Romeo und Julie von C.Gounod”*。

２　グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》

ヨーゼフ・シュトラウスによるポプリ〈ロメオとジュリエット〉は、グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》のモティーフを使用している。そこで最初に、ポプリの原曲であるグノーのオペラ《ロメオとジュリエット》の制作とパリ初演、ならびにウィーン初演について概観する。

2.1　オペラ制作とパリ初演

グノーの《ロメオとジュリエット》は、イギリスの劇作家シェークスピアWilliam Shakespeare（1564-1616）の戯曲*“Romeo and Juliet”*（1596）に基づく５幕構成のグランド・オペラである。台本はバルビエJules Barbier（1825-1901）とカレMichel Carré（1821-72）による仏語台本を使用。1867年４月27日にパリのリリック座Théâtre Lyriqueで、ロメオ役にミショー Pierre-Jules Michot（1832-96）、ジュリエット役にカロリーネ・カルヴァロCaroline Carvalho（1827-95）を配して初演された。グノーのオペラとして、《ファウスト Faust》（1859）に次ぐ成功を収めた[7)]。新聞各紙はこぞって賞賛を浴びせ、1867年５月４日付の*Le Ménestrel*紙のモレノHenri Moréno は、次のように書いている。「《ファウスト》と同等の価値を持つ作品が現われた。ベッ

リーニとヴァッカイによるロメオ作品はもはや陰に消え去るであろう」[8]。

《ファウスト》で世界的名声を確立したグノーは、リリック座の座長レオン･カルヴァロLéon Carvalho（1825-97）の依頼で、1860-62年に３作のオペラ[9]を作曲するが失敗。1864年初演の《ミレイユ *Mireille*》で再度の成功を収める。その直後に《ロメオとジュリエット》の制作に取りかかるが、完成までに２年を要した。《ロメオとジュリエット》は、パリ万国博覧会の開催中に初演され、その年にリリック座で100回以上の上演がなされた。万博に訪れていた多くの外国人にオペラは周知され、瞬く間に外国へ流布し、６月11日には早くもロンドン（伊語）、11月15日にドレスデン（独語）､11月18日にブリュッセル（仏語）、12月14日にミラノ（伊語）で上演された[10]。同オペラは、グノーの最後の成功作となる。1868年にパリのリリック座は経営破綻するため、グノーはこのオペラをオペラ・コミック座で上演するために改訂する。その後、オペラ座での上演も決まり、第３稿が編まれるが、これらの改訂は本論には関連しない。

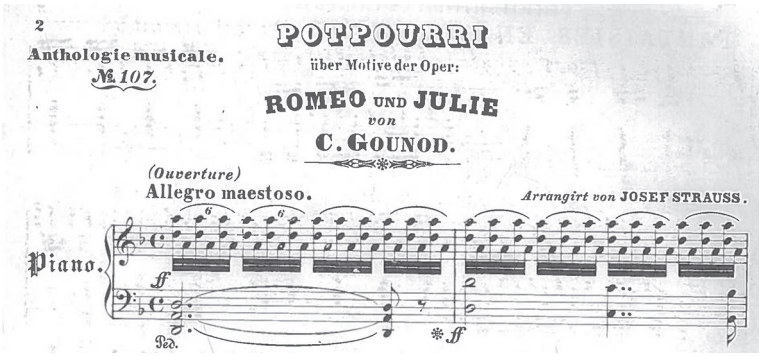
2.2　オペラのウィーン初演

オペラ《ロメオとジュリエット》のウィーン初演は、1868年２月５日である。作曲家自身の指揮により、ケルンテン門脇の宮廷劇場Theater am Kärntnertorで、ロメオ役にヴァルター Gustav Walter（1834-1910）、ジュリエット役にコロラトゥーラ歌手のムルスカ Ilma de Murska（1834-89）を配して行われた。台本はガスマン Theodor Gassmann（1828-71）の独訳版が使用された[11]。当時の宮廷劇場の第一級の歌手が出演した。翌日の*Wiener Zeitung* 紙は大成功を伝えており､「各幕の終わりに作曲者が大喝采を浴びた」とある。ウィーンにおいて同オペラの人気は定着し、1869年に新しい宮廷歌劇場 Hofoperntheater が開場した際には、こけら落としの演目としてモーツァルトの《ドン・ジョバンニ Don Giovanni》、開場２作目のオペラとして５月30日に《ロメオとジュリエット》がプログラムされた[12]。

３　シュピーナ社刊の『ポプリ選集』

ヨーゼフ・シュトラウスのポプリ〈ロメオとジュリエット〉は､シュピーナ社による『ポプリ選集』の第107巻として出版された。『ポプリ選集』は長い伝統を持つシリーズであり、シュピーナ社ではなく、メケッティ Pietro Mechetti（1777-1850）の創刊であった。ここでC.A.シュピーナ Carl Anton Spina（1827-1906）と『ポプリ選集』の関係を手短ににつ説明する。彼は父アントン Anton Spina（1790-1857）が働くディアベッリAnton Diabelli（1781-1858）の出版社に入り､父とディアベッリの引退後の1851年にC.A.シュピーナ社を立ち上げる。さらに1855年、メケッティの未亡人からメケッティの事業も引き継ぐことになる。『ポプリ選集』は､〈ドニゼッティのアンナ･ボレーナに基づく幻想曲〉を第１巻として1839年頃にメケッティが創始したシリーズで、ピアノ演奏用楽譜として20年以上も市場に提供された続けた。ヨーゼフによるポプリの冒頭部分を**図版１**に示す。

楽譜の右上に“Arrangirt von JOSEF STRAUSS（ヨーゼフ・シュトラウスによるアレンジ）”、左上に『ポプリ選集 No.107』の記載がある。出版年は記されていない。この作品の成立がグノーによるオペラのウィーン初演よりも前か後かを知ることは、同作品の背景を探るた



図版１：J. シュトラウスの〈ロメオとジュリエット〉

めにきわめて重要である。そこで手がかりとして、ライプツィヒの楽譜商ホフマイスターHofmeisterが編んだ楽譜販売目録*Musikalisch-literarischer Monatsbericht*'（HOFMEISTER 1867）を調査した。同目録は月刊で、ホフマイスターが新たに取り扱う楽譜を編成別に列記している。

ヨーゼフによる第107巻は、1867年11月の目録に、『ポプリ選集』の第103巻（Ricchi: *Crispino e la Cormare,* 伊語オペラ）、第104巻（Offenbach: *La Grande Duchesse de Gerolstein,* 仏語オペレッタ）、第106巻（Verdi: *Don Carlos,* 仏語オペラ）と共に記載されている。第103～107巻の楽曲を**表１**に示す。第104巻はすでに1867年８月の目録にも記載があるため、11月は２度目の掲載となる。第105巻〈アストルガ〉は本稿の最初に示した楽譜、つまりは筆者がみつけたもうひとつの楽譜を指すが、これについてはホフマイスターの目録に記載がみあたらない。しかし、この５曲のポプリは近い時期に編纂されたと考えることができる。

ホフマイスターの目録には、ヨーロッパ各地の出版譜が掲載されているが、実際の出版よりも数ヶ月遅れてホフマイスターの目録に登録されるのが常である。1867年11月に登録があるということは、第103～107巻は1867年にすでに出版されていた楽譜と断定できる。

表１：『ポプリ選集』第103-107巻の原曲とその初演

巻数	原曲のオペラ／オペレッタ								
	作曲者：題名	初　演				ウィーン初演			
		年	月	日	場　所	年	月	日	場　所
103	リッチ： クリスピーノと代母	1850	2	28	テアトロ・サン・ベネデット（ヴェネツィア）	1867	5	10	ケルンテン門脇の 宮廷劇場
104	オッフェンバック： ジェロルスタン女大公	1867	4	27	ヴァリエテ座（パリ）	1867	5	13	アン・デア・ウィーン劇場
105	アーベルト： アストルガ	1866	5	27	宮廷劇場 （シュトゥットガルト）	1870	6	24	カール劇場
106	ヴェルディ：ドン・カルロス	1867	3	11	オペラ座（パリ）	1932	5	10	宮廷歌劇場
107	グノー： ロメオとジュリエット	1867	4	12	リリック座（パリ）	1868	2	5	ケルンテン門脇の 宮廷劇場

注）ウィーン初演の典拠はBAUER 1955、第106巻の作品のみはLOEWENBERG 1978

ここで明らかなのは、ヨーゼフによるポプリ〈ロメオとジュリエット〉がオペラのウィーン初演よりも前に出版されていた事実である[13]。

さらに注目をひくのが、第103〜107巻のうちの３曲が、1867年春にパリの主要劇場で初演されている点である。前述したように、パリでは同年４月１日から11月３日までの217日間、万国博覧会が開催されていた。それにあわせて諸劇場で上演された劇作品がその年のうちにポプリとしてウィーンで発売されていたことになる。

４　パリ万博とシュトラウス家

1866年１月28日、ウィーン王宮のレドゥーデンザールで工業協会による舞踏会が開催された。この舞踏会のパトロンは、パリ駐在のオーストリア大使メッテルニヒ侯爵の夫人パウリーネ Pauline von Metternich（1836-1921）であった。彼女はパリで影響力を示すことができる人物で、シュトラウス兄弟は翌年の万博期間中にパリで演奏を行うために、３曲の舞曲を彼女に献呈した。ヨハン２世 Johann Strauss（1825-99）のワルツ〈ウィーンのボンボン Wiener Bonbons〉op.307、ヨーゼフのワルツ〈ドイツへの挨拶 Deutsche Grüsse〉op.191ならびにポルカ・マズルカ〈パウリーネ Pauline〉op.190である。兄弟は、首尾よく侯爵夫人の支援をとりつけることができ、その年の四旬節にパリへと視察に訪れ、演奏会場を物色する。しかしながら、適当な会場をみつけるには至らなかった。結局、兄弟はシュトラウス楽団をパリに連れて行くことを断念し、ヨハン一人がパリに行き、弟ヨーゼフは楽団とともにウィーンに留まる決断を下す。彼らの行動を追ってみよう。

4.1　パリのヨハン・シュトラウス

1866年７月、オーストリアはケーニヒツグレーツの戦いでプロイセンに大敗した。翌67年の舞踏会シーズンにも敗北の影響は影を落としたが、ヨハン２世は２月15日に〈美しく青きドナウ An der schönen blauen Donau〉op.314、２月18日に〈芸術家の生活 Künstlerleben〉op.316を発表し、成功を収める。その一方で、前年から計画していたパリ行きは、会場探しも不調で、経済的なリスクにもさらされていた。苦慮の末、５月になってヨハン２世は、ベルリンのビルゼ Benjamin Bilse（1816-1902）が率いる楽団[14]と共同で演奏会を開催することを決意する。５月28日、パリのオーストリア大使館でメッテルニヒ侯爵夫人主催のイベントが開催された。フランス皇帝ナポレオン３世も皇后ウジェニーとともに臨席し、〈美しく青きドナウ〉に賞賛を贈った。翌日、「イタリア座Théâtre Italien」でシュトラウスとビルゼは第１回共同演奏会を開き、その後は万博会場に近い「セルクル・アンテルナシオンCercle International」で連日２回の演奏会を開催した。ヨハン・シュトラウスはパリで大センセーションを巻き起こし、懸念されていた経済的な窮状も払拭した。ヨハンの妻イェッティ Jetty Treffz（1818-78）は、「朝の演奏会で1000フラン、晩の演奏会で2000フランのギャランティーを得た」（MAILER 1986:53）と手紙に認めている[15]。

パリのヨハン２世は、英国皇太子で後の国王エドワード７世の賞賛を受け、８月上旬にはパリからロンドンへと渡り、８月15日から10月26日までロイヤル・イタリアン・オペラ Royal Italian Opera（現在のコヴェント・ガーデン）でプロムナード・コンサートを開き、成功と国際的名声を獲得してウィーンに戻る。

ロンドンでは、コントラバス奏者ボッテシーニ Giovanni Bottesini（1821-89）とともに演奏会を指揮した。ここでも〈美しく青きドナウ〉は喝采を浴びた。

4.2　ウィーンのヨーゼフ・シュトラウス

1867年の舞踏会シーズンに兄ヨハンは数々の傑作を生み出したが、指揮の仕事からは身をひき、徐々にダンス音楽の作曲も減らし始めていた。ヨーゼフは、作曲・編曲・指揮に大車輪で取り組んでいた。1867年にヨーゼフが発表した新曲は21曲であり、その中にはワルツ〈うわごと Delirien〉op.212などが含まれる。また、５月17日にはフォルクスガルテンで〈リッチのオペラ: クリスピーノと代母に基づくカドリーユ〉op.224、６月２日にはノイエ・ヴェルトで〈オッフェンバックの喜歌劇: ジェロルステン女大公に基づくカドリーユ〉op.223を初演。これらの原曲は、ポプリ〈ロメオとジュリエット〉と同時期にシュピーナ社が出版したポプリの原曲と共通する。

そこで、兄が不在であった1867年春から夏にかけて、留守番の弟たちがどのような活動を行っていたか調べる目的で、*Neues Flemden Blatt (NFB)* 紙の「イベント広告欄 Vergüngungs Anzeiger」を調査した。同欄には演奏会などの情報が掲載されている。

4.2.1　1867年６月18日の演奏会

1867年６月18日付の紙面に、その日にフォルクスガルテンで開催される「ヨーゼフ＆エドゥアルト・シュトラウスによる演奏会」の広告が掲載されている（NFB, p.23）。ここに「新しい作品」として上げられている楽曲を**表２**に示す。

表２：1867年６月18日の予告曲

1	グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》からの抜粋 ａ）結婚行進曲 ｂ）ジュリエットのまどろみ ｃ）最終の二重奏
2	アーベルトのオペラ《アストルガ》からバルカローレと騎士の合唱
3	ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈戴冠の歌〉
4	エドゥアルト･シュトラウス：ポルカ・マズルカ〈心と心を通わせて〉
5	エドゥアルト･シュトラウス：ポルカ・シュネル〈縦横に〉

６月18日に、グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》からの抜粋曲が演奏予定であったことがわかる。〈結婚行進曲 Cortège Neptial〉は第４幕No.18、〈ジュリエットのまどろみ Le Sommeil de Juliette〉は第５幕No.21、最終の二重唱は第５幕No.22の一部である。オペラ後半から曲が選抜されている。この他に、アーベルトの《アストルガ》からの抜粋もみられる。ヨーゼフの〈戴冠の歌 Krönungslieder〉op.226は実際には６月７日、エドゥアルトの〈心と心を通わせて　Herz an Herz〉op.27は６月12日にいずれもフォルクスガルテンで初演された[16]。この種の広告では、初披露曲だけでなく、初演からあまり時間が経っていない曲も新作と宣伝したようだ。この予告記事で、《ロメオとジュリエット》と《アストルガ》からの抜粋曲には、「ここでは演奏されたことがない」と注釈がわざわざ付けられている。《ロメオとジュリエット》からの抜粋曲は、少なくともフォルクスガルテンでの３回の演奏会で、プログラムに組み入れられている[17]。

4.2.2　1867年７月24日の演奏会

次に、1867年７月24日の慈善演奏会の広告を**図版２**に示す[18]。「ヨーゼフ＆エドゥアルト・シュトラウス」の下に新作８曲が挙げら

れている。

K. K. Volksgarten.
Heute Mittwoch:
Fest-Concert mit Feuerwerk,
zum Benefiz von
Joseph & Eduard Strauss.
An Novitäten, zum 1. Male: 1. Großes Potpourri aus der Oper „Romeo und Julie" von Ch. Gounod (Neue Folge). 2. „Im Fluge", Polka schnell, von Joseph Strauss. — 3. „Fleurette", Polka française, von Eduard Strauss. — Ferner zu bemerken: 4. „Die Aufforderung zum Tanze" (von C. M. von Weber, orchestrirt von H. Berlioz). — 5. „Viktoria-Polka", française, — 6. „Nachtschatten", Polka-Mazur, beide von Joseph Strauss. — 7. „Kreuz und Quer", Polka schnell, — 8. „Herz an Herz", Polka-Mazurka, beide von Eduard Strauss.
Abwechselnd die Kapelle des k. k. Inf.-Regts. Freiherr von Habermann.
Zum Beschlusse des Festes: Feuerwerk von A. Stuwer. — Vorher gelöste Karten à 50 kr. sind zu haben in der k. k. Hof-Kunsthandlung C. A. Spina, sowie im Café-Salon im Volksgarten. — An der Kasse Eintritt 70 kr. — Im Falle unfreundlicher Witterung: Concert Strauss, das Fest dann Samstag den 27. Juli. 10539

図版２：1867年７月24日の演奏会広告

（1）グノーのオペラ《ロメオとジュリエット》に基づくポプリ（初演）、(2）ヨーゼフのポルカ・シュネル〈大急ぎで Im Fluge〉op.230（初演）、(3）エドゥアルトのポルカ・フランセーズ〈小さい花 Fleurette〉op.29（初演）、(4）ウェーバーの〈舞踏への勧誘〉（ベルリオーズによる管弦楽版）、(5）ヨーゼフのポルカ・フランセーズ〈ヴィクトリア・ポルカ Viktoria Polka〉op.228[19]、(6）ヨーゼフのポルカ・マズルカ〈夜の陰影 Nachtschatten〉op.229[20]、さらには６月18日にも演奏されたエドゥアルトの（7）〈縦横に〉と（8）〈心と心を通わせて〉。注目すべきは、「新作」と書かれた次に、“Großes Potpourri aus der Oper *Romeo und Julie*” von Ch. Gounod（Neue Folge）”と書かれていることである。これこそ、《ロメオとジュリエット》に基づくポプリである。この曲は、その後に９回の演奏会で演奏予告されている[21]。

シュトラウス楽団の演目に、グノーの《ロメオとジュリエット》に基づくポプリが含まれていたことは、シュピーナ社のポプリ楽譜が単なるピアノ譜として存在するだけでなく、実際にオーケストラで演奏された演目であることを示唆する。

4.3　シュトラウス家とシュピーナ

*NFB*紙の広告を調査すると、早くも1867年５月26日にシュトラウス楽団がノイエ・ヴェルトのこけら落としで、ヴェルディのオペラ《ドン・カルロス》の抜粋を演奏していることが判明した。ヴェルディの《ドン・カルロス》はパリ万博にあわせてパリ・オペラ座で初演された仏語オペラであるが、ウィーンではナポレオンを扱った題材を理由に、1930年代まで検閲を通らなかった。それを抜粋の形ながら、1867年のうちにシュトラウス楽団が演奏していた事実はきわめて興味深い。

上記の観察の結果、パリ万博にあわせてパリで上演された音楽劇は、すべてが初演から比較的すぐに、ウィーンのシュトラウス楽団によって演奏されていたことがわかる。しかも、それらのポプリは、ウィーンのシュピーナ社が1867年の夏頃までに楽譜として出版した事実もある。ヨハン・シュトラウス２世は、この年のパリで大成功を収め、世界的な名声を獲得した。当時のシュトラウス家は、シュピーナ社と契約を結んでいた。シュピーナは単に楽譜出版を行うだけの関係ではなく、作曲家のエージェントを兼ねていた。それを裏付けるように、ヨハン・シュトラウスは、パリ行きを企てていた時機に、パリの支援者ドスモン伯爵Charkes Xavier Eustache d'Osmond（1829-83）との交渉を、シュピーナに委任している。1867年２月23日に行われた「伯爵とシュピーナの面会」について、伯爵の秘書であるロアゾン Loison氏が証言を残している（MAILER 1986: 38）。すなわち、シュトラウス家とシュピーナは緊密な関係にあり、両者はパリでの出来事や上演楽譜を迅速に共有できる間柄にあった。シュピーナ社が出版した『ポプリ選集』の原曲を含め、多くの楽曲（な

らびに楽譜）にも、ウィーンのヨーゼフはすぐにアクセスできる立場にあったと推測できる。

5　ポプリ〈ロメオとジュリエット〉の楽曲構造

それでは、ヨーゼフ・シュトラウスによるポプリ〈ロメオとジュリエット〉に目を戻してみよう。ポプリの構造と原曲オペラとの関連を**表３**に示す。表の左側にポプリの構造を、右側に原曲オペラの対応箇所を示した。

ポプリは508小節から構成されており、７つの部分（Ⅰ～Ⅶ）に区分することができる。使用されているオペラのナンバーは６曲であり、それらが並置されている。オペラの順序が崩されているのはⅢの部分のみであり、第２幕のNo.9の二重唱がNo.6よりも先に出てくる。それ以外は、オペラの順序に従っている。モティーフは第１～３幕から引用されており、第４～５幕からの引用はない。その点は、シュトラウス楽団がフォルクスガルテンで演奏した抜粋曲（第４～５幕からの抜粋）と大きく異なる。

各部分を細かくみていこう。Ⅰの部分は「序曲」を引用しているが、途中が省略され、短縮されている。Ⅱでは、ジュリエットが歌う第１幕No.3のアリエット〈私は夢に行きたい Je veux vivre〉の全体が引用されている。212小節からなるⅡはポプリの42％を占める。調性はオペラのヘ長調からト長調に移されている。原曲と調性が異なるのは、この部分だけである。Ⅲは、第２幕No.9の二重唱のうち、３拍子の部分（第91～144小節）を抜粋し、ヨーゼフ自身の作と推測される導入部が付加されている。Ⅳは、第２幕冒頭の器楽部分の引用で、Ⅴへの移行部の役割を果たしている。Ⅴは、第２幕No.12のステファノが歌う「シャンソン」からの引用。冒頭のレチタティーヴォ

表３：ポプリの構造とオペラとの関連

ポプリ（ヨーゼフ･シュトラウス）の構造						オペラ（グノー）の対応箇所				
区分	小節番号	小節数	拍子	調	テンポ	オペラのナンバー	小節番号	拍子	調	テンポ
Ⅰ	001-032	32	4/4	d	Allegro maestoso	Ouverture-Prologue	001-032	4/4	d	Allgero maestoso
	033-054	22	4/4	D	Andante	Ouverture-Prologue	105-156	4/4	D	(Andante)
Ⅱ	055-266	212	3/4	G	Allegretto	Act1: No.3 Ariette: Je veux vivre（Juliette）	001-212	3/4	F	Tempo di Valse animato
Ⅲ	267-280	14	3/4	D	Allegretto	***	***	*	*	***
	281-333	53	3/4	A	(Alleretto)	Act2: No.9 Duo: Ah! ne fuis pas（Romeo, Juliette）	091-144	3/4	A	Allegretto
Ⅳ	334-369	36	6/8	F	Andante	Act2: No.6 Entre'act: 器楽演奏部分	001-035	6/8	F	Andante
Ⅴ	370-450	81	3/4	F	Allegretto	Act2: No.12 Chanson: Que faistu（Stephano）	019-099	3/4	F	Allegretto
Ⅵ	451-456	6	4/4	F	Allegro	***	***	*	*	***
	457-483	27	4/4	a	(Allegro)	Act3: No.13 Final: Capulets! Capulets!（Ensemble）	188-214	4/4	a	(Allegro)
	484-495	12	4/4	a	(Allegro)	Act3: No.13 Final: 器楽演奏部分	275-286	4/4	a	(Allegro)
Ⅶ	496-508	13	4/4	a	(Allegro)	***	***	*	*	***

注）オペラの小節番号はナンバーごとのカウント; インチピット=対応箇所の出だしの言葉；
　***＝「対応部分なし」を示す

が割愛され、３拍子に拍子転換する第19小節から曲の最後までが引用されている[22]。Ⅵは、第２幕No.13最終場面からの引用であり、登場人物全員によるアンサンブル部分（第188～214小節）だけを使用し、続くレチタティーヴォをすべて排除し、No.13の中間に出現する器楽部分をこの部分の終結として用いている。Ⅶはヨーゼフ作曲のコーダである。

実質的に、ヨーゼフによるポプリ〈ロメオとジュリエット〉は、オペラの中で印象的な数曲だけから構成されている。ジュリエットのアリエットはとくに魅力的であるし、ステファノのシャンソンも耳に心地よいメロディーが奏でられる。オペラを特徴づけるロメオとジュリエットによる４曲の二重唱からも１曲が選ばれ、最後に第３幕のフィナーレと器楽をうまく配置している。ポプリ全体では３拍子の部分が70％を超える。３拍子のリズムに乗せて、ヨーゼフはオペラを上手くアレンジしたのである。

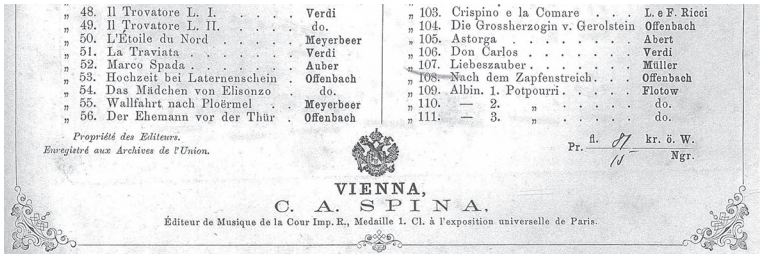
しかし、「アレンジであるから現代の作品表に楽曲が登録されないのだ」と結論づけることはできない。父ヨハン・シュトラウス１世 Johann Strauss（1804-49）の作品には多くのポプリが含まれ、独自の作品にカウントされている。ポプリとオリジナリティの関係を論じることは本論の主旨からは外れるので、ここではこれ以上は掘り下げない（詳細は鍵山［若宮］2008を参照）。本論で扱ったポプリがヨーゼフの作品表に含まれていないのは、楽譜の存在が知られていなかったからだと、筆者は考えている。

６　消された作品

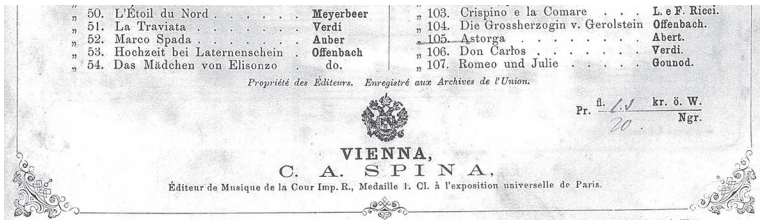
オーストリア国立図書館で筆者が閲覧した『ポプリ選集』は、複数曲を合本した体裁であった（全ての巻が揃っている訳ではない）。これを精査すると、奇妙なことに気づく。第107巻として、もうひとつ別の曲、ミュラー Adopf Müller（1839-1901）の〈愛の魔法 Die Liebeszauber〉に基づくポプリが存在することだ[23]。この楽譜の表紙下部を**図版３**に示す。

『ポプリ選集』の各巻の表紙には、第１巻からそれまでに出版された全作品が列記されている。〈ロメオとジュリエット〉が出版された時には、No.107の欄に “Romeo und Julie. Gounod”と明記されいた。“Romeo und Julie” の記載のある楽譜表紙を**図版４**に示す。

図版３では、“Romeo und Julie. Gounod”の代わりに、No.107の欄に“Liebeszauber. Müller” と記されている。〈愛の魔法〉はウィーンで制作され、1868年７月25日にノイエ・ヴェルトで初演された。ミュラーは劇場付の作曲家で、主としてオペレッタや歌芝居などの軽喜歌劇を書いた。彼が劇制作に長い時間をかけたとは考えられない。また、ホフマイスター


„ 48. Il Trovatore L. I. . . . . Verdi
„ 49. Il Trovatore L. II. . . . . do.
„ 50. L'Étoile du Nord . . . . . Meyerbeer
„ 51. La Traviata . . . . . Verdi
„ 52. Marco Spada . . . . . Auber
„ 53. Hochzeit bei Laternenschein . Offenbach
„ 54. Das Mädchen von Elisonzo . . do.
„ 55. Wallfahrt nach Ploërmel . . Meyerbeer
„ 56. Der Ehemann vor der Thür . Offenbach
„ 103. Crispino e la Comare . . . L. e F. Ricci
„ 104. Die Grossherzogin v. Gerolstein Offenbach
„ 105. Astorga . . . . . Abert
„ 106. Don Carlos . . . . . Verdi
„ 107. Liebeszauber . . . . . Müller
„ 108. Nach dem Zapfenstreich. . . Offenbach
„ 109. Albin. 1. Potpourri . . . . . Flotow
„ 110. — 2. „ . . . . . do.
„ 111. — 3. „ . . . . . do.
Propriété des Éditeurs.
Enregistré aux Archives de l'Union.
Pr. fl. 8/ kr. ö. W.
10 Ngr.
VIENNA,
C. A. SPINA,
Éditeur de Musique de la Cour Imp. R., Medaille 1. Cl. à l'exposition universelle de Paris.

図版３：No.107に“Liebeszauber”と記された楽譜


„ 50. L'Étoil du Nord . . . . . Meyerbeer
„ 51. La Traviata . . . . . Verdi
„ 52. Marco Spada . . . . . Auber
„ 53. Hochzeit bei Laternenschein . Offenbach
„ 54. Das Mädchen von Elisonzo . do.
„ 103. Crispino e la Comare . . . L. e F. Ricci.
„ 104. Die Grossherzogin v. Gerolstein Offenbach.
„ 105. Astorga . . . . . Abert.
„ 106. Don Carlos . . . . . Verdi.
„ 107. Romeo und Julie . . . . . Gounod.
Propriété des Éditeurs. Enregistré aux Archives de l'Union.
Pr. fl. 1.V kr. ö. W. 20. Ngr.
VIENNA,
C. A. SPINA,
Éditeur de Musique de la Cour Imp. R., Medaille I. Cl. à l'exposition universelle de Paris.

図版４：No.107に“Romeo und Julie”と記された楽譜

は1869年５月の販売目録に同楽譜を掲載している（HOFMEISTER 1869: 85）。目録では、同じ項目に第112～114巻も記載されている。第107巻と第112巻では巻数に隔たりがあることから、第107巻の曲が後になって差し替えられたと類推される。しかも、〈ロメオとジュリエット〉と〈愛の魔法〉のプレート番号は、同じC.S.19313である。同じプレートを使い回すことは散見されるが、違う曲に同じプレート番号を付与することは、本来、あり得ないことである。そして、〈愛の魔法〉以後に出版された『ポプリ選集』の楽譜表紙には、第107巻としてミュラーの作品が掲載され続けている。ヨーゼフによる〈ロメオとジュリエット〉が消された理由はわからない。しかし、何らかの理由があったと考えるのが妥当である。

７　結論

2014年３月、ウィーン・シュトラウス研究所が主催したウィーン大学でのシンポジウムで、ケンプ Peter Kempはヨーゼフ・シュトラウスの〈日本行進曲 Japanesischer Marsch〉に関する発表を行った。この曲はロシアでのみ出版され、ウィーンでは出版されなかった[25]。ケンプは長年にわたり同楽譜を探して世界中を調査したが、発見には至らなかったという。しかし、2012年にオーストリア国立図書館の「総合カタログ Hauptkatalog der Österreichischen Nationalbibliothek」に忽然と蔵書記録が現われた。新規購入された訳ではなく、ハイドン研究で有名なホーボーケン Anthony van Hoboken（1887-1983）の遺品整理が進み、成果が反映されたらしいというのだ。本稿で論じたヨーゼフのポプリも、同じような背景を持つ可能性がある。

『ポプリ選集』は1830年代から脈々と出版が続けられた。第１～42巻まではホテク Franz Xaver Chotek（1800-52）が、第43～59巻までは別の作曲家たちが編曲者として楽譜上に名前が示されており、編曲者の作品としての作品番号も付与された[26]。しかし、第60巻以降の大半には編曲者名が示されていない[27]。そうした状況下で、第103巻と第107巻には何故ヨーゼフ・シュトラウスの名前が記されたのか。おそらくシュピーナ社に名前を記す理由があったのであろう。他方で、この曲にはヨーゼフの作品としての作品番号は与えられていない。単なる販売目的である可能性はあろう。また、シュピーナとシュトラウス家の親密な友好関係の反映とみることもできる。確かに、ヨハン２世によるパリ万博とロンドンでの大成功は、シュピーナに巨額の利益をもたらした[28]。しかし、こうした推測は予想の域を脱していない。第107巻の差し替えの件も同様である。事情解明には、さらな

る調査と新しい証拠の発見が不可欠である[29]。

[注]

1）アーベルトはボヘミアに生まれ、1853年にシュトゥットガルト宮廷楽団に入り、1867～88年に楽師長を務めた。《アストルガ》（台本：Ernst Pasqué, 3幕）は1866年5月27日にシュトゥットガルト宮廷劇場で初演された。物語は、18世紀初頭に活躍したイタリアの作曲家Emanuele d'Astorga（1680-1757）を扱っている。オーストリア国立図書館の所蔵番号はM.S.4572-4º.31 Mus。

2）オーストリア国立図書館の所蔵番号はM.S.4572-4º.34 Mus.

3）「作品番号なしに出版された作品」として、*"Das musikalisches Österreich"*（ピアノ譜, 1862）, *"Faust-Potpourri"*（1862）、「消失作品」としてに *"Musikalisches Panorama"*（1856）, *"Die Hochzeit bei Laternenschein"*（1862）, *"Concert-Potpourri"*（1863）, *"Strauss und Lanner"*（1864）, *"La forza del destino"*（1865）, *"Souvnir à la Patti"*（1865）, *"Zum Jahreswechsel, Sylvesterlieder"*（1865）を掲載。この目録は、それまでの目録に含まれるポプリを網羅している。

4）*"Musikalisches Panorama"*（1856）, *"Die Zaubergeige"*（1859）, *"Tschin-Tschin"*（1860）, *"Das musikalisches Österreich"*（1864）, *"Souvenir à la Patti"*（1865）を掲載。いずれも初演日と初演場所が付記。*"Das musikalisches Österreich"*の年代がKEMP 2001とは異なるが、LINHARDT 2006とは同じである。

5）「作品番号のない現存作品」（出版譜/手稿譜は区別せず）として、*"Faust-Potpourri"*（1862?）,*"Das musikalische Oesterreich"*（1864）,「消失作品」として*"Musikalisches Panorama"*（1856）, *"Die Zaubergeige"*（1859）, *"Tschin-Tschin"*（1860）, *"Musikalisches Feuilleton"*（1862）, *"Strauss und Lanner"*（1864）, *"La forza del destino"*（1865）, *"Souvenir à la Patti"*（1865）, *"Sylvesterlieder"*（1865）を掲載。

6）エドゥアルトは馬車7台分の楽譜を焼却したとされ、貴重な手稿譜を含む楽団所有の楽譜はほとんどが消滅した。

7）グノーのオペラ《ファウスト》は、1859年3月19日にパリのリリック座で初演。初演場所ばかりでなく、台本作者も《ロメオとジュリエット》と同じである。初演年から1868年までに300回以上上演された。

8）ベッリーニは1830年にヴェネツィアで抒情悲劇 *"I Capureti e i Montechi"*を、ヴァッカイは1825年にミラノでオペラ*'Giulietta e Romeo'*を初演している。

9）*"Philémon et Baucis"*（1860）, *"La colombe"*（1860）, *" La reine de Saba"*（1862）.

10）LOEWENBERG 1978: 990.

11）ガスマンの台本の不備や主役ムルスカの歌唱力を批判する新聞記事も刊行されたが、それでもウィーンでの人気は維持された。

12）宮廷歌劇場の開場は1869年5月25日。《ドン・ジョヴェンニ》の題名は*'Don Juan'*を使用。26日と29日にも《ドン・ジョバンニ》、28日にはバレエ公演が行われた。

13）第105巻〈アストルガ〉の出版年を示す証拠はないが、巻数から推測して、この作品もオペラのウィーン初演前に楽譜が出版されたと考えられる。

14）ビルゼの楽団は後にベルリン・フィルハーモニに発展する。

15）3000フランは現代の通貨換算で約300万円に相当。

16）〈縦横に Kreuz und Quer〉op.28は「6月21日初演」とシェンヘルの目録には記載されている（SCHÖNHERR 1982: 193）。

17）6月18日、6月21日、7月16日。

18）1867年7月24日付の*Neues Fremden Blatt*紙p.19。

19）1867年6月27日、ホテル・ヴィクトリアで初演。

20）1867年7月5日、フォルクスガルテンで初演。

21）1867年7月30日、8月2日、6日、9日、13日、20日、27日、30日、9月3日。*Neues Fremden Blatt*紙の演奏会広告には、曲目記載のないものも多々存在する。これらのすべての演奏会にヨー

ゼフが立ち会っていた訳ではない。８月上旬には体調を崩して保養に出かけている。彼が仕事に復帰するのは９月である。

22）経過的な最後の２小節を除く。

23）オーストリア国立図書館の所蔵番号はM.S.4572-4º.33 Mus。

24）No.103〈アストルガ〉の表紙。M.S.4572-4º.31 Mus.

25）日本の文久遣欧使節団のロシア訪問に遭遇したヨーゼフ・シュトラウスが作曲。St.Petersburg: Büttner社が出版。

26）Johann Carl Metzger, Ferdinand Waldmüller, Adolf Müller, Julius Hopp.

27）第74巻にFr. Doppler, 第80巻にC.F. Stenzl, 第92巻にF. Waldmüllerの名前が記載されている。

28）**図版３**の出版社名“C. A. SPINA”の下には、小さな文字で「パリの万国博覧会でメダルを獲得」と記されている。

29）本稿は、日本ヨハン・シュトラウス協会2014年10月例会（2014年10月19日）での発表「シェークスピアとシュトラウス：新発見⁉ヨーゼフのポプリ『ロミオとジュリエット』」に一部基づいている。

［参照新聞］

オーストリア国立図書館: “ANNO［AustriaN Newspaper Online］= Historische Österreichische Zeitungen und Zeitschriften（http://anno.onb.ac.at/）で閲覧。以下、閲覧新聞 *Neue Freie Press; Neues Fremden Blatt; Wiener Zeitung; Wiener Abendpost; Zellner's Blätter für Theater, Musik und bildende Kunst.*

［参考文献］

BALLSTAEDT, Andeas

1997 “Potpourri”, *in* FINSCHER（*MGG*）1994-2008, Sachteil Bd.7, pp.1759-1761.

BAUER, Anton

1955 *Opern und Operetten in Wien.* Graz/Köln: Hermann Böhlaus.

BRUSATTI, O. & SOMMER, I.

2003 *Josef Strauss 1827-1870.* Holzhausen, Wien.

FINSCHER, Ludwig（ed.）

1994-2008 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart (MGG).* 21 Bände. Kassel: Bärenreiter.

HOFMEISTER（ed.）

1867-69 *Musikalisch-literarischer Monatsbericht.* Leipzig: Hofmeister. http://www.hofmeister.rhul.ac.uk/2008/content/database/database.htmlで閲覧.

HUEBNER, Steven

1992 “Roméo et Juliette”, *in The New Grove Dictionaey of Opera.* London: Macmillan, vol.4: pp.31-33.

井上, さつき

1999『パリ万博音楽案内』東京：音楽之友社.

JAHN, Michael

2001 “Gounod und Wien – Stationen eines Erfolges” *in Gounod: Roméo et Juliette.* Wien: Wiener Staatsoper. pp.22-27.

鍵山, 由美［若宮, 由美］

2008「1840年代のウィーンにおけるポプリとカドリーユの関連:バルフの《ハイモンの息子たち》に関する考察」in『お茶の水音楽論集』（お茶の水女子大学）第10号, pp.1-13

KEMP, Peter

2001 "Strauss", *in* SAIDIE 2001, vol.24, pp.474-496.

LINHARDT, Marion

2006 “Strauß”, *in* FINSCHER（*MGG*）1994-2008, Personenteil Bd.16, pp.11-54.

LOEWENBERG, Alfred

1978 *Annals of Opera 1897-1940.* Totowa: Rowman and Littlefield.

MAILER, Franz

1977 *Joseph Strauß. Genie wider Willen.* Wien/München: Jugend und Volk.

1986 *Johann Strauß (Sohn). Leben und Werk in Briefen und Dokumenten.* Bd.2: 1864-1877. Tutzing: Hans Schneider.

1999 *Johann Strauß. Kommentiertes Werkverzeichnis.* Wien: Pichler.

2002 *Joseph Strauss: Kommentiertes Werkverzeichnis.* Frankfurt a.M.: Peter Lang.

PRIKOPA, Herbert

2004 *Strauss-Führer durch Europa und die umliegenden Ortschaften.* Wien: Ibera.

SADIE, Stanley (ed.)

2001 *The New Grove Dictionary of Music and Musicians.* 2nd ed. 29 vols. London: Macmillan. Vol.24, pp.474-496.

SCHÖNHERR, Max

1982 *Lanner, Strauss, Zieler.* Wien, München: Doblinger.

若宮, 由美

2013a「博覧会的なピアノ曲集としての“Aus der Musikstadt”(1892)」*in*『埼玉学園大学人間学部紀要』第13号, pp.167-179.

2013b「ヨーゼフ・シュトラウス考①〈劇場カドリーユ〉から垣間見るウィーン劇場界」*in*『日本ヨハン・シュトラウス協会会報』第292号, pp.22-24.

WEINMANN, Alexander

1967 *Verzeichnis sämtlicher Werke von Josef Strauß und Eduard Strauss.* Wien: Ludwig Krenn.